

白紙余談

AIを搭載しないロボットが体現する生身のコミュニケーションの大切さ

◇先日、ロボット技術をテーマにテレビ放映された、あるドキュメンタリー番組をみていて、軽い衝撃を受けると同時に、深い感動を経験した。

◇ドキュメンタリー番組で取り上げられていたのは、ロボットコミュニケーションの肩書をもつ青年、折り紙の達人でもある青年、さらに、分身ロボット「オリヒメ」を開発して話題を呼ぶ株式会社オリイ研究所代表取締役でもある青年、吉藤健太郎さんだ。

◇今年33歳になったばかりの吉藤さんが開発したロボット「オリヒメ」は、ロボットの進化に不可欠と捉えられていた人工知能AIとは無縁だ。吉藤さんの「オリヒメ」は、生産性の効率化なども目指していない。人と人を繋ぐコミュニケーションツールとしての役割に特化した、アニメチックな風貌の人型ロボットだ。

◇近年話題を呼んできた人型ロボットは、ホンダのアシモにしても、ソフトバンクのペッパーにしても、搭載されたAIがロボットみずからの動きを生み出し、制御している。鉄腕アトムのような万能型ロボットからは程遠いが、人ではない、単体の存在としてそこにある。ところが「オリヒメ」は人が遠隔操作することによって、初めて持ち味を発揮する。

◇「オリヒメ」にはカメラレンズが取り付けられていて、操作する人はそのカメラに映る「オリヒメ」の目の前にいる人たちと、音声機能によって会話できる。「オリヒメ」は首を動かしたり、両手を動かしたりするシンプルな動きで、操作する人の感情を表現できる。ごく単純な動きだが、操作する人の生の声と一緒に動く

で、感情豊かにみえる。だから「オリヒメ」の前にいる人たちは「オリヒメ」を操作する人が、あたかもそこに実際にいるような気分になって会話できる。

◇「オリヒメ」は基本的にレンタルで、現在100社近い企業がレンタル会員になっている。たとえば地方出張する人が、留守中の会議に出席したいという場合、自分の代わりに「オリヒメ」に出席してもらおう。「オリヒメ」と連動する端末をもっていけば、全国どこにいても「オリヒメ」を通し、自分が会議の席にいるような気分に参加できる。周囲の人も同様に感じる。

◇こうした「オリヒメ」の機能は、たとえば無菌室で暮らさなければならぬ患者、病院などで寝たきりの境遇にある人などが、外部の家族や友人と普通に会話するためのツールとしても最適だ。番組では心身重症児が、移動機能のあるバージョンの「オリヒメ」を通じて接客業のバイトをする様子も紹介されていた。

◇子どもの頃に数年間の引きこもり経験のある吉藤さんは、AI研究者だったが、試行錯誤の末、AIを搭載せず人がAIの代わりにするコミュニケーションロボット「オリヒメ」を開発した。人と人のコミュニケーションは、ヒト同士でないとできないという当たり前の真実を「オリヒメ」は改めて気付かせてくれる。

◇企業内のコミュニケーションも同様だろう。このメッセージを発している吉藤さんが、辛い引きこもりを経験し、病的なまでに難しかったコミュニケーション恐怖症を「オリヒメ」で解消したという事例の体現者でもあるだけに、説得力はより一層に増す。(E)